

教師を育てた 言葉たち

No. 003

東京都立北園高校 鈴木公美先生

すずき・ひろみ

◎教職歴35年。同校に赴任して7年目。主幹教諭。3学年主任。国語科。

東京都立北園高校 全日制/普通科/共学/1学年約320人/2017年度入試合格実績(現役のみ):国公立大は、埼玉大、千葉大、東京外国語大、東京学芸大、横浜国立大などに37人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ644人が合格。



教 師にはそれぞれ自分の「よりどころ」があります。私にとっては、ホームルーム活動や文化祭などの特別活動がそれにあたります。しかし、かつて、中退者が多く、指導上の対応が困難な学校に勤務した時は、生徒指導に手いっぱいと思うように特別活動に取り組むことができず、行き詰まっていた。確かなよりどころを手に入れたいと考えた私は、40歳の時、東京都教員研究生に応募し、大学で1年間、臨床心理学者の1教授の下、「居心地のよいホームルーム」を主題に研究に取り組みました。

カウンセリングに関する学会にいくつも参加し、勤務校の生徒にヒアリングやアンケート調査、検証授業を行いました。どうすれば居心地のよいホームルームができて、生徒が中退せずに済むのか、何か月も考えましたが、研究の見通しはなかなか立ちませんでした。悩む私に1教授がおっしゃった一言が「**柔軟さをヒントに考えてみなさい**」でした。

教 授の言葉の意味はすぐには分かりませんでした。しかし、研究を進めるうちに、ホームルームで「常に中心的存在」「いつも控えめ」など、最近の言葉で言う「キャラ、が固定していると、生徒は居心地の悪さを感じるのだと分かってきました。リーダーシップのある生徒も時にはぼんやりしたいし、おとなしい生徒もたまには自分の言葉がみんなに受け入れられ、ホームルームが動くような体験をしたいのです。ホームルームでの個々の生徒の役割が「柔軟」に変わることが、居心地のよさの要素として浮かび上がってきました。

そして、柔軟さは私たち教師にも大切なことだと気づきました。以前の私は、「学校は公平な場でなければならない。指導においては、厳しくあるべき」と考えていました。しかし現実には、同じ遅刻をした生徒でも、恵まれた生活環境の中で遅刻する者もいれば、保護者に代わって弟や妹の世話をしている遅刻する者もいます。もちろん、遅刻に関しては理由によって「これはよい」「これは駄目」と指導に差をつけるわけにはいきません。でも、公平性ばかりを追求し、一辺倒に厳しく指導することが生徒にとって本当に公平なことなのか、ずっと考えていました。

ここに、「柔軟」という言葉をあてはめると、生徒へのアプローチが変わることに気づきました。家庭の事情で遅刻する生徒には「頑張っていることは分かっているよ。でも遅刻は駄目だよ」と声をかけ、一見恵まれた家庭環境の生徒も実は他人には言えない悩みを抱えているのかもしれないと、自分の思い込みを取り払って接する。目に映る姿だけにとらわれず、見えない部分を想像して生徒を理解しようとすることで、生徒にかける言葉が変わるのです。「柔軟」という言葉に出合ったことで、私が抱えている課題のほとんどが解決できた気がしました。

今 でも、自分が行き詰まっていると感じた時は、この言葉を噛み締めながら、生徒に対する思い込みはないか、自問自答します。ホームルームは偶発の産物です。生徒も教師もお互いを選べないからこそ、柔軟で、居心地のよいホームルームを目指したいと思うのです。